

人文会ニュース

1987.5

中小出版社の在庫徹底収集の試み……………竹内紀吉 1

ポン・本・書物……………関 曠野 8

人文書講座Ⅺ

遊びの世界が飛翔するとき……………松田道弘 15

旭屋書店・人文会研修会報告

旭屋書店営業部本店 隅山泰助 29

弘報委員会 丸山正美

人文会特約店にみる中小書店の消長……………村上信明 36

48

業務用

夫婦カウンセリング

P・ヤング・エイゼンドラス 村本／織田訳
フェミニズムの立場から、結婚生活における
女性のあり方に再検討を加える。二一〇〇円

ザ・社会心理学バザール

田中国夫編著 人が見え、社会が見え、自分
が変わる手づくりの社会心理学。一五〇〇円
ECC—欧州統合の現在
金丸輝男編著 歴史的背景、機構、経済政策
など激しく変貌する実体を探る 二〇〇〇円

創元社

〒530 大阪市北区西天満1-4-2 ☎06-363-2531
〒162 東京都新宿区山吹町77 ☎03-269-1051

谷川健一 私の民俗学

谷川民俗学のエッセンス／南島、
蝦夷・東北、地名など日本文化を知
る上のキーポイント。1900円

進化論の基盤を問う

シュペーマン、レーヴ著 山脇直司他訳 生命現象
に関する現代の進化論的説明を見直す。3000円

東海大学出版会

東京都新宿区新宿3-27-4東海ビル☎(03)356-1541

「昭和の賢人」の全業績を網羅した決定版

田中美知太郎

全集

増補決定版
●全26巻

■第一回好評発売中・第一巻 5800円 ■
『ロゴスとイデア』『善と必然
との間に』 ●解題―藤沢令夫

●第二回 第9巻 4月20日刊 4600円

旧版全集元結後の諸発言・
金著作を収め昭和の賢人
の全業績を網羅した決定版
全巻に詳細な解題を付した。
■解題・函入・月報付・定
価各巻不同 内容見本送呈
筑摩書房

東京神田小川町2 電話03(291)7651〒101

開国の作法

UP選書 平川祐弘

本格的な国際化時代を迎え、「大國」日本の作法はどうあるべき
か。二本足の比較研究者が、豊かな外国体験と日本文化研究を
背景に綴ったエッセイの数々 四六判・一五〇〇円

寺崎昌男編

総力体制と教育

皇国民「鏖成」
の理念と実践

戦時下教育の具体相を、当時の教育理念・スローガンたる「皇
国民鏖成」概念を軸にして解明した画期的な研究。新資料付す

御領謙 A5判・一八〇〇円 単語を読んで理解する過程の認
識科学的分析を通じて、人間の
読むということ 認識の機構を解明することを目
録知科学選書5 ●内容見本呈 ざす。(補綴・笹沼淳子)

東京大学出版会

〒113 東京都文京区本郷 電話811-8814

中小出版社の在庫徹底収集の試み

浦安市立図書館 竹内 紀吉

多くの市立図書館が書庫を持たないことは、しばらく前まで一種の常識のようになっていた。

ひとつには都市部に建つ図書館の用地の確保がむずかしかったからだが、いまひとつの理由としては、市民の日常生活に位置づけられるべき図書館の運営は、まず資料の貸し出しということを重視したことにもよっている。

市立図書館運営の理念は今日の公共図書館の在り方を決定した日野市立図書館の実践によるところが大きいのだが、その日野の図書館が当初書庫を持たずに発売したことから、市立図書館だから書庫はいらないという短絡した発想が生まれてきたように思われる。

日野の図書館はそんなことは言っていないのである。

書庫を持たなかったのではなく、日野でもまた用地の関係で持てなかったことは、その歴史を語った本の記述からも知ることができる。(注)

各地に生まれた市立図書館は、一〇年、二〇年と歴史を刻んで来た現在、その歳月の間に蓄えられた蔵書をどうするかという切実な問題にいま直面している。都道府県立図書館の資料購入費が伸び悩んでいるのに比べて、市立図書館の資料費が近年大型化してきていることは、この問題に拍車をかける結果になっている。新しく建った図書館が、例えば宇都宮、八王子、成田といったところが、いずれも三〇万ないし四〇万冊の収蔵を見込んだ大型の書庫を持つように造られたのは、先に述べた情況と深くかかわっている。いずれ、市立図書館といえども大型の書庫を持たねば駄目だという説が、図書館建設時の常識となるに違いない。書庫を持つか持たぬかは、たんに資料保存のスペースの有無だけの問題ではなく、図書館サービスの質にかかわる重要な可能性がそこには存在している。大型書庫を持つことで、市立図書館は、サービスの質的向上が格段に果たせるようになると私は考えている。

昭和五八年三月に開館した浦安の中央図書館は、蔵書収容能力二〇万冊、四つの分館は四万から五万冊のスペースを持っているが、全蔵書は三六万冊を越し、いずれの施設も収容能力の限界に近づいている。書庫棟の建設は収蔵能力が限界に近づいた時点で考える事としてきたが、資料購入費に恵まれてきたお陰で(昭和五七年度から経常的に一億円を越す資料費がついていて、これは人口一人当たり千円台の予算となる。全国的にみて市のレベルで百円台に達していればまあいいほう、二百円台なら相当に良いとせねばならぬのが実情であることを考えれば、浦安市がいかに図書館に力を注いでいるかが理解出来る)その時期は考えていたよりも早く来た。この四月から浦安の図書館では大型保存書庫の建設準備が始まっている。二箇年の継続事業で、計画通りに仕事が進めば、六三年七月には現在の図書館に隣接して五〇万冊以上の収蔵能力を持った書庫が建つはずである。延べ床面積は三千平方米を越すであろうから、ちょうど今の中央図書館が倍になる広さである。五〇万冊という数字は、浦安の推定人口が上限に達する昭和七五年で開架図書五〇万、保存図書五〇万、人口一人当たり五冊以上の蔵書規模を

維持しようという計画から来ている。

従来、図書館の書庫といえ、そこには利用者を入れない、いわゆる閉架書庫を意味してきたが、浦安で持つことになる書庫は準開架で維持していきたい考えである。つまり希望する市民が自由に書庫に出入りできる運営を考えているのである。

本は利用者の手に触れられてこそ借りられるものであることは、県立図書館に働いた経験から実感している。開架図書がひとたび書庫に編入されると利用は二十分の一、三十分の一に落ちてしまうのである。利用の落ちた本や刊行年の古い本を現役の棚から後退させる必要は確かにあるが、それを「閉架図書」としてしまうのは、利用者の便を考えてというよりも、建物の構造上の事情や職員数の関係からであることの方がはるかに多い。できることなら、それら二群図書もまた一群とのつながりにおいて、必要とする利用者がいつでも手にしうる目につきやすい状態で維持されるべきではないのか。また図書館には保存という機能もたしかにあるが、保存は利用されるためにこそするのだから、紛失を恐れる意識が優先

されてはならないはずだ。文化財的な貴重資料の扱いは別に考えればよいことで、ことに市立図書館は、市民生活に密着した運営をしているのだからこの点はやりやすい筈なのである。しかし私が書庫の準開架にこだわるのはもうひとつ別の理由がある。

図書館は出版界の苦境を他人ごととしていてよいのか。ことに出版流通機構の持つ隘路のために息たえだえになっている良心的な中小出版社とのかかわり方を考えなくてはよいのかというところから「準開架」が生まれてくるのである。

多くの図書館は新刊図書を中心にして、利用者を迎えている。刊行されて五年を経過すれば利用は極端に落ちるとされているから、市立図書館の性格として新刊に多くの注意が払われるのは当然だが、ひとたび流通経路から外れた図書については、それがいかに良書であっても利用者には出版情報すらが届きにくくなるわけで、図書館はそういう利用者のためにどれほどの手当をしてきたのであろうか。書店が新刊図書の目まぐるしいサイクルで店頭を維持し、しかも売れる本をということ、質の

低下をきたしていることは誰もが認めるところだが、質ということを考えずにサービスしていれば図書館もその轍をなぞることになりかねないのではあるまいか。

本が売れない、経営が苦しいという切実な声は良心的な出版を続けている中小の出版社に多い。図書館がこの声に無関心でいるわけにはいかないはずである。図書館人が蔵書の質をいくら守ろうとしても、良い本をつくる版元が淘汰されてしまったのでは、その意図を実現しようがないわけで、俳優のいない舞台の演出を任されているようなものだ。仕事にはならないのである。良心的な版元と図書館は本来相互扶助の関係にあることを今こそわれわれも切実に考えなければならぬと思う。

作家の中野孝次さんは、ある講演会で蔵書というものはそれを持つ人の人格の現れであると言ったあとで、もし図書館が人格というものをもつのだとすればそれはその図書館の蔵書に現われているのではないかと続けている。なるほどその通りである。図書館にならぶ本は、そこで働く人達の、本に対する見識や読書量が如実に現われてしまうのは隠しようがない。

自分の働く図書館の蔵書の質を維持しようとすれば、

その質を支えてくれる出版社をどうしても大切にしていかなければならない。それは図書館の義務とさえいえるであろう。現在の図書館全体の購買力が、出版界の不況を救うものにほど遠いことは認めるが、それでも冒頭に触れたとおり次第に力を持ちつつある。図書館が支えてくれるからこの出版は成り立つ、そう言われる存在に図書館は育たねばならないのである。図書館があることによって出版の質が維持されてこそ我が国の文化は確かな基盤に支えられていると言えるのではあるまいか。

話を浦安図書館の書庫に戻せば、保存書庫が実現出来ることになって、一つの試みを私達は始めている。

人文系中小出版社の代表的な所を、数十社選んで現時点で購入漏れになっている出版物を全点購入しようという計画である。六一年度でまず十一社の在庫を押さえた。選びだした出版社を列記すれば、みずす書房、白水社、未来社、勁草書房、理想社、人文書院、晶文社、サイマル出版会、河出書房新社、中央公論社、筑摩書房などである。厳密に言えば中小出版社の枠をこえた社も若干入っているが、規模が問題ではないので、それには触れずに話を先に進める。これらの出版社の実績については誰も

が認めるところだが、出版社の選定に当たっては司書による収書グループの総意とした。人文系中小出版社としたことは、まず自然科学関係においては学会、研究所、企業の調査室などが比較的整い、読者が所属機関から最新の情報が得やすくなっていること。また、資料的価値が時間の経過と共に推移しやすいことから対象としなかった。また、大手の場合は大きな図書館で比較的収集が徹底していると考えられるので、これも外して考えた。

選んだ版元については、出版傾向が変わらぬ限り新刊は総て購入していくし絶版、品切れとなったものには、古書店に依頼して収集をはかる。要するに、これらの版元の本は浦安へ行けば必ずあるという状況を作りたいのだ。もちろん国立国会図書館はこれらの総てを、また主要な都道府県立図書館でもかなりのものが揃っていると考えられる。しかしその多くが閉架書庫にしまわれていて、利用者の手にも目にもほとんど触れられないのが現実である。国会図書館や都道府県立図書館が、保存の必要から閉架図書を維持するのは、その性質上認めない訳ではない。しかしそうした本が、当初からろくに店頭にも並ばず、出版情報としても読者に周知されぬまま、

宣伝力に乏しい中小出版社の在庫品として眠ってしまう現状を思うと、市民に直結している市立図書館の立場で、これをなんとか出来ないかと考えを深めざるを得ない。大型の書庫さえ持っていれば、これを準開架として、第一線の図書の延長で市民に提供できる。利用者からすれば、世の中にこんな本が出ていたことすら知らなかったという出会いにもつながるし、一定主題を追及している読者には、まだ入手出来るという情報の提供にもなるだろう。効果は微々たるものかも知れないが、版元にとってはいささかのショールームの役割も果たせるかも知れないのである。

浦安では前述の十一社に加えて、今年と来年で一〇社ずつ追加して、およそ三〇社の徹底収集を図りたいと考えている。

徹底的収集を図った十一社について少し細かな点に触れておくと、昭和五六年度の開館準備期から購入してきた本を除き、各社の在庫目録から語学教科書など資料的価値の乏しいものを外して、収集した総冊数は五、九九三冊、総額で一、七七一万円ほどとなっている。こ

れから購入していく各社の新刊図書については、昭和六一年で調べてみると雑誌を除き一、六五五冊、総額で二七〇万円程である。

浦安の場合、当初からの収集率が高かったこともあるが、代表的な十一社を押えたわりには、総額では予想した額をずっと下回っていた。金額的なこともさることながら、某社の例では、昭和五六年から数えて五年、当時購入した本のうちかなりのものが今では絶版、品切れとなっているのにも驚いた。地味な、内容本位の本づくりをしていることで定評のある社が、在庫で細く長く商売して行けなくなっている事情がそこから分かるのだが、少数しか刊行できず、しかも早々に絶版、品切れとななければならぬのでは商売そのものが成り立ちようがないのではあるまいか。読者と版元の間につつまの立場というものに痛感されてならないのだった。

先に述べた総額や、継続していく新刊購入費が図書館にとって重いか、そうでないかはそれぞれの館の予算規模にかかわることで、一概にはいえないが、考え方さえ決まれば、予算と収蔵規模に応じた収集は図れるのである。

浦安が三〇社を対象に徹底収集するといっても、弱小出版社で出ている人文関係図書をも含めれば、氷山の一角を崩したことくらいにしかないかもしれない。だが幾つかの市立図書館がこうした試みを始めたとしたらどうだろう。収集のダブる出版社は出てくるとしても、少しづつお互いが欠を補う収集をしていけば、都道府県単位で相当の保存体制が確立するのではあるまいか。同様の試みが雑誌については、市立図書館間で保存協定が作られ、図書館間の相互貸借に役立てられている地域があるし、千葉県内においても数年前からこの協定の検討に入っている。人文系の図書についてもこれが出来ないはずはないのである。

幸いなことに千葉県では、市川市、千葉市、松戸市などを始め大きな自治体が、新しい図書館の建設を考え始めている。成田について、浦安が、さらに大きな五〇万冊以上の書庫を持てば今後の図書館建設に決定的な影響を与えることは間違いない。始めに触れたとおり市立図書館の資料費が大型化しているし、そのうえに大きな書庫がつくられるなら、保存体制への条件は二重に整ってくると言わなければならない。

改めて言うまでもなく、図書館の運営は単館で行えるものではない。各館の協力体制によるネットワークがサービスの密度を高める要になる。細い紐をより合わせて太い綱が出来るように、いま電算化時代を迎えている図書館はネットワークの構築に向かって動きつつある。しかし構築されたシステムが意味をもつのは図書館相互が充実した資料を持つことによってであろう。そうでなければ話はシステム化のためのシステムに終わる外はないのである。

書店に良い本が並ばなくなった。出版の質が益々低落している。このままでは良心的な出版社が次々と消えて行くのではないか。そういう不安は時間の経過とともに根深くなっている。危機感とよんでもいいほどに問

題は深刻である。しかしそれを嘆くばかりではないのである。図書館は出版界の抱える危機感を、自分のものとしなければならぬ。そして我々が何を出来るか考えなければならぬまい。出版界を救おうなどという大それたこと以前に、図書館の存立にかかわる問題がそこには存在しているからである。

注『図書館の誕生』 関千枝子著 日本図書館協会

竹内紀吉（たけうち のりよし）

一九四〇年、東京生まれ。中央大学文学部卒業。千葉県立中央図書館を経て、現在、浦安市立図書館長。著書に『図書館の街 浦安』（未来社）がある。

青木書店

林 雅行著

天皇を愛する子どもたち

●日の丸教育の現場で

台頭する皇国史観・右翼復古主義教育の実際を現場からレポートし、その沿革と人脈を探り出して、管理主義教育と並ぶもう一つの教育危機の実態に肉迫する。

（46判）定価一八〇〇円

「シリーズ」地球の歴史をさぐる

全16冊

第一回発売中

大気のおいたち

秋山雅彦著

定価一四〇〇円

大気はいつできあがったのか。従来の学説を紹介しながらも、著者独自の考えをにかけて興味ぶかく探る。

東京都千代田区神保町1

ポン・本・書物

§ 古本屋の世界

出版社や新刊書店には悪いが、新刊書のあのキラキラした感じはあまり私の好みではない。やはり古本屋こそ私がこの世で一番くつろげる場所である。これは勿論、私が現代という時代のあわただしさと薄っぺらさを心底から嫌っているせいでもある。人間には下らぬ時代とは付き合わなくてもよいという権利があるはずだ。それは、個人に孤独になることへの権利を認めなければ本当の共同体は存在しえないのと同じことなのだ。だから私は時代から古本屋の書棚への孤独なる逃走の権利に固執する。しかしながら古本屋の店内が時代の外の涅槃や彼岸などでないことは言うまでもない。反対に我々は古本屋に

関 曠 野

おいてこそ改めて自分の生きている時代に出会う。だいたい、本というものは銘酒や煮込み料理と同じで少し時間をかけて寝かせておかないと味がでてこない（その意味では一、二年で忘れ去られてしまうような本は、本というより紙製品、とも呼ばれるべきだろう）。そして見識ある古本屋の棚には、主にそうした少し味のできた本が選ばれ並べられている。つまり——フランス語の文法用語を借りるならば——骨董屋の「大過去」の世界に対して古本屋は我々の現在とつながりのある「複合過去」の世界を呈示しているのであり、しかもこの「複合過去」の世界と対峙することによってこそ、我々はいかなるニュース・メディアよりも確実に自分が生きている時代の手

触りを感じることができるとだ。時代の見えない底流や潜在的動向が、まず古書の相場に現われることが多いことは、周知の事実である。だから、私はヒマさえあれば古書店街を徘徊しないような出版人を信用しない。

さらに考えてみれば、古書の価格形成システムは資本主義的な市場の論理から二重三重に外れている。いかなる近代経済理論によってもその価格を説明できない以上、古本は資本主義的商品とはいえない。おそらくこのことが、古本屋に特有のあのくつろいだ親しみやすい雰囲気の説明する。大型の新刊書店では、昨今とみに装丁が派手になった新刊書が並んだかと思うとすぐに入れ替えられ、そうした新製品の隊列が醸し出すどこか単調で殺伐とした雰囲気は打ち消すべく、BGMなどが流れていることが多い。そこを出て薄暗く静かな古本屋の書棚のしつとりとしたモザイクの世界、年ふりた慎ましげな古書の群れが生み出すあの意外さにみちた雑多な秩序に戻るとき、私のようにほっとする人も少なくないだろう。ここには純粹な需要と使用価値にだけ基づいた本来の交換経済があり、時間と質による淘汰という論理が、はじめから資本蓄積の論理を排除している。大型新刊書店を現代

のメガロポリスに喩えるならば、古本屋は多様な存在の不規則な雑居によって奇想と生氣に富む秩序を形づくるパロック都市にほかならない。

平野の上にとどまるな！

あまりに高くも登るまい！

半分ぐらいの高さから

この世の眺めは、いと見事。(1)

古本屋の「複合過去」の世界も、このニイチェの格言を空間から時間に置き換え、少しばかり前の時代にわれわれを誘うことによって、われわれの時代を「いと見事」にみせてくれる。だから出版文化についての私の理想は、出版社と書店の在り方を少しでも古本屋の世界に近づけることにある。加えて私の古本屋好きには実用的な理由もある。というのも古本屋の店先をのぞいてみて、「なんだ少し前にこんな面白い本が出ていたのか」と驚くことがしょっちゅうあるからなのだ。古本屋こそ私の学校だった。私のものの考え方を変えた本はおおかた、古本屋の書棚でふと見つけた本である。少なくとも古本屋さんたちのおかげで、私は若い時以来つまらぬ流行や風潮とかかわらずに済んできた。

§ ポンとは何か

長々と古本屋論をやってきたのは、出版社と新刊書店に嫌味を言いたいからではない。出版文化というものを流通と企画の原点に立ち戻って考えてみたかったのである。まず流通について言えば、巷には本の洪水があるにもかかわらず良書の入手はますます困難になりつつある。情報化時代どころか新刊書の情報も減ってきた。書棚の中身が目まぐるしく入れ替わる新刊書店では、未知の本との心ときめく出会いということも滅多になくなり、それどころか私の住んでいる新宿から電車で三十分程の首都近郊都市でも書店ではコミック・コーナーが全盛で、クセジュ文庫や岩波現代選書あたりもきれいさっぱりパージされてしまった。ましてや良心的なミニ出版社から出た拙著などは「いくら探しても見つからなかった」という話をよくきく。もっとも、書店をとおして本を注文する習慣が日本の読者層にはさほど普及していないことにも驚く。だが注文という手も効かない場合さえある。私の名古屋在住当時の経験では、いくら注文しても比較的小さい版元から出た思想書や社会科学書が届かず、結局は年に何回かリュックを背負って東京に本の買い出しに

行く羽目になった。その一方では、丸善名古屋支店に発注すればイタリアの本でさえ入手できたのだからおかしいことである。名古屋地域は書籍流通網から切り捨てられていくらしい。

どんな文化もまずモノの文化として始まる。出版文化もまた、モノとしての本が流通しないことには話にならない。そこで、良心的な出版社がみな流通の問題で苦しんでいることは承知しているつもりだが、岡目八目ということもあるので二、三の提言をさせて頂ければと思う。まず第一に、目下の売上税問題がどう決着するにせよ、出版業は本来中世ギルド手工業の世界なのだから、業界の性格に見合った流通方式をもっと開発すべきではなからうか。日本の出版業は農業と同様に将来は産直方式によってしか生きのびられない、と私はみている。ギルド手工業の世界が何も多国籍企業と同質のマーケティングの論理に従うことはないのだ。大体この業界には初版が売り切れになればそれで上々、重版になればめつけ物という清廉の士が多いはずである。二、三千部の初版なら産直方式の応用も不可能ではあるまい。出版界の産直方式には種々な手法が考えられようが、読者、とくに地方

や大都市近郊の読者の悩みの種は広告などで知った新刊書の実物を手にとってみる機会が実に少ないことである。実物もみずに広告やタイトルだけで本を発注する人がそんなにいる訳がない。そこで業界の実情にうとい者としてだが、良心的出版社が共同出資して自社の本を長く棚に置く直営店を作ってくれないかと私は思うのである。

そうした直営店は各県庁所在地ないし場合によっては東京を除く七大都市にあるだけでもいい。地方にこそ読書する時間的余裕のあるひたむきな読者がいること、そして日本の歴史において革新の機運は常に地方から発してきたことを出版に携わる人たちには忘れてもらいたくない。自社の倉庫を各地に陳列棚付きで分散したと思えばいいではないか。共同出資が無理ならば、脱サラして書店をやりたい人も多い今日、そうした人に資金援助をするという手もある。倉庫の共同管理ささうまくいかない業界の実情を知らない訳ではないが、出版界は種々な相互扶助的産直方式の実現に努力すべき時期ではないか。流通上の次の問題としては、出版界というこのギルド制手工業の世界にさえマネーゲームの論理が押しよせてきている状況に対処して、従来の「本」という漠然とし

た概念は改める必要があるのではないか。七十年代以降の資本主義のサービス業化に伴ない、例えば飲食業界には随分分岐がみられる。喫茶店で言えば、一杯百五十円のコーヒースタンドもあれば並のコーヒート軽食を出す普通の喫茶店、そしてモカやマンデリンを入念に入れて出す専門店があり、この三つのカテゴリーは明確に区別されている。それなのに本に限ってはコミックや週刊誌から教養書や実用書や学術書まで全てごたぎりに扱われ、新刊書の洪水の中で書店の限られたスペースが奪い合いになる状況はおかしいのではないか。私は何もコミックや週刊誌の存在を非難しているのではない。ただ本の性格がこれほど違うものを、流通に際して均質に扱うドンブリ方式が当を得たものかどうかと言いたいだけなのだ。そこで私としては、本をコミックや週刊誌その他キワモノ本のような全くの消耗品としての「ボン」、普通の読書と教養のための単行本を中心とした「本」、古典や学術書、思想書など経済的弱者になりがちな「書物」の三つに分類することを提案したい。出版社、書店もこれに応じてボンヤ、本屋、書店の三者に区分けすべきである。あるいは一つの出版社および書店の内部構成もボン、本、

書物の三部門に区分けさるべきである。こうすれば本と書物の流通対策がはつきりしてくる。その際に先の直営店方式と並んで考えられることは、専門店方式であろう。米国には三階建てのビルのフロアが全て文化人類学書で埋めつくされた書店があるそうだが、日本でも神田の古書店街などは昔から専門店方式をとっている。「本」と「書物」に関して専門店が各地に生まれ、良書が書棚に何年も置かれるようになれば、出版文化を古本屋の水準に高めるという私の夢が少しは実現することになる。

§ オルガナイザーとしての編集者

次に出版企画の問題だが、「視聴覚文化の盛況が活字文化を駆逐する」という昨今の巷間の俗説は、編集者の企画力の貧困をごまかすための言訳にすぎない。衰退しつつあるのは一定の老朽化した活字文化である。たぶん六世紀頃の西欧にも、文盲のゲルマン人共を惹きつける教会芸術という視聴覚文化の隆盛を目のあたりにして、ラテン文学という活字文化の死を嘆いた学僧や文人貴族がいたことだろう。しかし視聴覚文化と活字文化という二つの文化の間には、相互の盛衰に関するいかなる因果

関係もない。むしろ現代においては視聴覚文化の方さえ、カール・クラウスのネクラな予言どおり、ステロタイプ化の果てに衰亡しつつあるといえるだろう。昔のアメリカ映画とポルノでやっともっているテレビとビデオの視聴覚文化が、何で上昇中の文化などあるものか。

近代日本の活字文化は、この国の急速な産業化を背景に学校と大衆ジャーナリズムを核として形成された。だからいわゆる活字文化の危機は、学校とマスコミの影響力の衰退を物語るものにすぎない。そうなると露呈してくるのが、出版文化を支えるべき様々な文化がこの国の風土にひよわな根しか下ろしていないという問題である。出版文化は、例えば、読書文化、書齋文化、図書館文化、印刷製本文化、書評文化といった一連の文化のネットワークに支えられているものだ。しかしながら日本には、欧米のように書評を職業として食えている人間が、一人でもいるだろうか。悪名高いウサギ小屋の国で、自宅に書齋を設ける余裕のある日本人がどれほどいるだろうか。米国はシアトルの市立図書館には、日本関係だけで五千冊以上の蔵書があるそうだが、日本の地方中堅都市の公立図書館で米国関係で五千冊の蔵書のある図書館が一つ

でもあるだろうか。こうしてみれば、現時点で日本の出版文化の意義と展望を問うことは、近代日本の上げ底の産業化の過程をもう一度問い直すことに等しい。

日本の産業化に伴ったものは学校・マスコミそして流行だが、流行の方もそろそろポストモダンで種が尽きたらしい。学校文化の下請け、マスコミの提灯持ち、流行とタレントを追うスノップ、そうした編集者の時代はもう終わったのだ。今こそ古本屋のオヤジ風の編集者の養成を考えるべき時である。マスコミで働いていた当時に私がおかしいと思ったことの一つは、新聞社が入社したての若い記者たちに容疑者の人権に関する刑事訴訟法の初歩も教えずにサツまわりをやらせることだった。日本の近代社会には至るところに、こうした基本的な事柄の手ぬきがある。編集者に関しても、社員としての訓練はあっても出版人としての訓練はない。しかし編集者は文化のオルガナイザーであり、たんなる原稿運びや物書き人足をかき集める寄せ場の手配師ではない。だから出版各社も編集者の養成に少しは金を出すことを考えるべきである。

思うに編集者は、過去と現在をつなぐ存在、そして貴

重で特異な情報をもつ内外の個人や専門家と公衆との間に橋を渡す存在として、文化のオルガナイザーである。それゆえに私としては、これからの編集者には、秀れた書き手の発掘は勿論のこととして、各分野の古典や名著をきちんと出すこと、また専門化の時代であればなおさら各分野の境界領域に光をあてるような著作を出していくことを望みたい。しかしこうした方向でよい仕事をするには、広範で均斉のとれた見識と教養が必要である。これからの時代は、文科系だからといってエントロピーの概念を知らず、理科系だからといって世界史を知らないような編集者はダメである。知識の量ではなく良質の基本的な教養が必要なのだ。そしてそうした総合的な教養こそ、日本の学校教育には全く期待できないものなのだから、出版社は編集者の養成に金を出せと私は言いたいのだ。

だいたい日本に出版会館とか編集者クラブといったものがないのはおかしいのではないか。この国では文化に関することは常に万事エチオピア的窮乏状態にあるのだが、編集者が問屋制家内手工業の丁稚扱いされていることほど情ないものはない。出版文化関係者の交流と研鑽

には飲み屋があればいいというものではない。いずれ東京の地価が下落した折には、出版各社はギルドの建物を作り、そこに編集者向けの教養講座や市民向けの読書案内センターなどを設けるべきである。出版文化再興のためには、これぐらいのことを団結してやる意欲がなくてはとうしようもない。

最後に付け加えれば、大方の単行本には著者の略歴が場合によっては御本人の顔写真付きで麗々しく紹介され、装丁したデザイナーの名も記されているのに、編集者の名が入っていないのはおかしいのではないか。編集者の名も奥付けに入れるようにすれば、志が高く見識ある編集者の名が業界雀以外にも少しは知られるようになるし、何よりも黒子^{くろこ}の匿名性をいいことに無定見な思いつき本や誤訳だらけの翻訳書をノー・チェックで出す編集者の数が減るのではなからうか。私がこんなことをあえて言うのも、一国の文化と政治を究極的に左右するのは文化オルガナイザーとしての編集者であると信じているからである。一国の法と政治は、とどのつまりはその国の出

版文化に支配される。編集者たちがしっかりした仕事をやっている限りは、政治的デマコギーや偏向教科書が我をあらぬ方向に引っぱることなど不可能なのだ。編集者こそ言葉と文化の掟というこの世で一番強力な掟を作る人々である。この事実のゆえに、かつての中国や朝鮮では古典や辞典や史書や全書の編纂は、皇帝と国王の栄光にみちた使命とされていた。そして言うまでもなく、中国と朝鮮は読書・編纂・印刷に関して世界最高の出版文化を誇った国だった。日本の活字文化の危機は即ち漢字をメディアとする文化への関心の危機であり、流行を追うのに忙しい出版界が自国や東洋の文化的伝統に無関心な読者を作ってきたことにも一因がある。とするならば、ポスト産業化時代における出版文化のルネサンスは、まず編集者諸兄が東アジアの偉大な出版文化の伝統に立ち帰り、『皇帝』としての責任を自覚することから始まるのではあるまいか。

(1) 氷上英廣訳「華やかな知恵」(新潮文庫)、二二頁より引用。

遊びの世界が飛翔するとき

遊戯研究家 松田道弘

「使うときに使わないで、使わないときに使うものは？」

これは古い日本のなぞなぞです。

(なぞの呂圖利曼)

西洋式バスタブの普及とともに、実用品としての風呂のふたの用途を知らない子どもたちがこれからはふえていくことでしょう。かつての日用品であったつるべ、七輪、火ばちなどの言葉が死語化への道をたどっていきま

みられなくなってしまうのです。実用書も同じ苛酷な運命をたどります。実用的性格のきわめて強い遊びの本ほどその風化作用の速度もはやいのです。ファミコンの異常人気で一九八六年に出版界の常識を破る超ベストセラーになった『スーパーマリオブラザーズ完全攻略本』（徳間書店）も、数年後には日本中どこをさがしても見つけだすのが困難な完全消失本になる可能性だってあるのです。かつての人気本『インベーダー攻略本』（ヘラルド出版）、『なぞの六面体組立法』（ダイナミック・セラーズ）が、果して今どこで見つか

るでしょうか。遊びの世界は「現われたものは必ず消える」盛者必滅のことわりが支配する無常界です。このようにうつろいやすく「久しくとどまることのない」遊びの本の流れの中から、たまたま私が読んでおもしろいと思った本を何冊かとりあげて紹介しましょう。

これはイギリスの子ども向きのリドルブックにあつたなぞなぞです。

問 ソウはどうして爪の先を赤く塗るのか？

答 イチゴ畑にかくれるため

ソウのように巨大な動物が、姿をかくすことなどというてい不可能なイチゴ畑でしかも身体のごく一部だけを赤くマニキュアしてカムフラージュに役立てようという発想は、不条理でナンセンスとしかいいようがありません。笑うことのできる人しか笑わないのです。ソウが主役をつとめるこの種のナンセンス・タイプのなぞなぞを欧米では「エレファント・ジョーク」を呼びます。言葉あそび、ワード・ゲームとしてのなぞなぞは、しばしばジョークの一種に分類され、ジョーク・ブックに収められることも多いのです。

外国のジョークは日本人向きではないという気がばりがあったためでしょうか、長い間外国ジョークの翻訳といえは、フランス小咄風のエロティック・ジョークがその主流でしたが、いつかその流れも変わってきました。

『ユダヤ・ジョーク集』（ラビ・トケイヤー著・実業之日本社）のヒットは、その後国名別ジョーク・シリーズの十冊にあまる続刊となりましたが、元祖「ユダヤ・ジョーク」が頭抜けて面白く笑えるのは、ユーモア・センス豊かな編者のたしかな選球眼のせいでしょう。

ジョーク・ブックでは角川文庫の『ポケット・ジョーク・シリーズ』（植松繁編訳）が新旧ジョークを網羅して充実しています。テーマ別にまとめられてすでに十数冊が刊行されていますが、その中で「禁断のユーモア」や「いじわるユーモア」、「動物」などがとりわけ面白く、たとえば「ロープに恋をした近眼のヘビの話を知っているか？」（動物）といった、ちょっと日本人には思いつかない異常な視点からの奇抜な発想のジョークをたのしむことができます。またアメリカでベストセラーを記録したラリー・ワイルドというコメディアンジョーク・シリーズも一部が翻訳されていて光文社文庫の世界ジョー

ク集の中に「犬と猫のジョーク」、「ゴルフ・ジョーク」というふうにもこれもテーマ別に収められています。

なぞなぞといえ、世界各国の伝承的ななぞなぞを集めた本が何冊もあり、『なぞなぞの本』（福音館）、『世界なぞなぞ大事典』（大修館書店）という大冊もあります。いっぽう子ども向けのなぞなぞ本は、これはもうファミコン攻略本とともに集団異常発生としかいいようがなく、書店のスペースをうめつくして繁殖しています。その中で私が面白いと思ったのは『ニューウェーブなぞなぞ』（二見書房）です。一種のいじわるなぞなぞですが、だまされることがお互いに楽しみあう暗号解読形式のパーティー・ゲームをここまで開発したエネルギーには感服します。

だます、という言葉はあまりいい感じを聞く人に与えません、トリックというだましのテクニクがなくては、映画やテレビ・ドラマ、ミステリーなどの大衆娯楽も、うその世界をほんとうの世界のようにみせかけて迫真性をうみだすことができません。

映画というつくりものの世界の中で、観客をだますということが、いかに職人芸を必要とし、難しいけれどた

のしい仕事であるかを、二人の技巧派の映画監督が、情熱をこめて語りあったテクニク論が『ヒッチコック映画術トリュフォー』（晶文社）ですが、遊びの本というカテゴリーからはすこしはみだすかもしれません。

フィクションとちがって、現実の日常性の中にもうひとつのふしぎの世界をつくりだすのが、マジックというトリック・ゲームですが、タネあかしの実用書はたくさんあっても、トリックの魅力について語った本は非常にまれです。『トリック交響曲』（泡坂妻夫著・文春文庫）はめずらしくもうれしい例外例です。推理作家であると同時にアマチュア・マジシャンでもある著者が、虚実のからくりの世界の秘密を軽妙なエッセーで説きあかします。また同氏の『魔術館の一夜』（社会思想社）は、氏のオリジナル作品を解説しながら読みものにも仕立てた意気こんだ野心作です。同じような趣向を英国の奇術研究家ジョン・フィッシャーが『キャロルの大魔法館』（河出書房新社）で奇術とパズルを結びつけようと試みています。

トリックの原理を豊富な実例とイラストでわかりやすく紹介した本に『魔法の心理学』（高木重朗著・講談社

新書)があります。

だまし、だまされるのをたのしむ遊びという感覚はどうもこれまでの日本人の好みに合わなかったようで、アメリカの国民ゲームと呼ばれるブラフのゲーム、ポーカーが、日本ではまるで人気がありません。

『ザ・ギャンブラー』(A・アルヴァレス著・新潮社)は、イギリスのルポ・ライターが、ラスベガスのポーカー・ワールド・シリーズを取材したもので、ポーカーというゲームの魔力と、それにつかれたギャンブラーの「生活と意見」をビビッドに紹介しています。たとえば「ギャンブルを発明したやつは利口にちがいないが、チップを発明したやつは天才だ」といった名文句が随所にでています。

ポーカーと並んで国際的にポピュラーであるのに日本で人気のないゲームにチェスがあります。今ではもはや過去の伝説の戦いになった感じがなくてもいいのですが、世界一のチェス・チャンピオンの座をめぐって、アメリカのフィッシャーとソ連のスパスキが一九七二年の夏から秋にかけてレイキャベクで火花を散らす死闘を演じ

た歴史的対決をルポしたのが『白夜のチェス戦争』(ジョージ・スタイナー著・晶文社)です。チェスに興味のない人でも「対戦者の自我をぼろぼろにする」プレーヤーの勝負に賭ける執念には、ある種の感慨を覚えるのではないかと思います。チェス入門書でわかりやすく面白いのが『チェス入門』(東公幹著・河出書房新社)です。ポーカーやチェスといったインターナショナルなゲームが日本ではやらないのは、麻雀、碁、将棋という三大国民ゲームが厳存するからでしょう。中でも競技人口が多いのが将棋です。四百年の将棋の歴史でもはじめてと編者が自負する『将棋戦法大事典』(大修館書店)は、戦法ごとに分類集大成した千ページをこえる大冊で、基本戦法の変遷を体系的にマスターしたいというファンには貴重です。

『将棋の来た道』(大内延介著・めこん)は異色作です。将棋は中国から渡来したというこれまでの定説にチャレンジして、東南アジアにそのルーツをさぐろうとする、専門棋士のユニークな旅行記兼勝負物語に仕立てられています。

なぞなぞが言葉遊びとしてのオール・ゲームだとすると、パズルはさしづめメンタル・ゲームというところでしょうか。思考を柔軟にする、頭の回転を数倍にするといったキャッチ・フレーズをつらねて、パズル・ブックがつぎからつぎへと量産されています。もし私が数あるパズル・ブックから一冊だけを選び出せといわれたとしたら、マーティン・ガードナーの『パズル・コレクション』（東京図書）を推せんします。ジュニア向きに書きおろされた本ですが、手抜きが一切なく、イラストへの配慮、問題の選定、その出題形式、どれも文句のつけようがありませんが、日本版の印刷と紙質がよいのは残念です。

ガードナーの本は粒ぞろいの名著でどれも安心して推められます。『Ach! ひらめき思考』『Gotha! ゆかいなパズルボックス』（どちらも日経サイエンス）は、柔軟思考のトレーニング・テキストとしてきわめて優秀です。発想法といえば元祖『水平思考の世界』（エドワード・デ・ボノ著・講談社）の世界的ヒット以来、日本でもアイデア開発法が一種の出版ブームになりましたが、その内容はアイデアを直ちに何か役立つことに利用しな

ければならないという性急な功利主義的なおしつけが強く、思考を開放して頭を遊ばせるという本来の目的にそった本がなかなかみつかりません。その中で私が多少なりとも心をひかれたのは『頭にガツンと一撃』（R・イーク著・新潮社）と、子ども向きの発想教本『考える練習をしよう』（マリリン・バーンズ著・晶文社）です。

私の好きなパズル作家にレイモンド・スマリアンがいます。論理パズルの演出に新しい分野を切りひらいた人といつてよく『この本の名は?』（TBS出版）、『パズルランドのアリス』（社会思想社）など名著がたくさんあります。私がいちばん好きなのは『チェス・ミステリーズ・オブ・シャーロック・ホームズ』（一九七九）というチェスの珍問題集ですが、この本が翻訳される望みはまずないといつていいでしょう。

国産のパズルはまさしく玉石混交の有様で、なかには「これがパズル?」と首をひねりたくなる商品もたくさんあります。その中でユニークだと思ったのは『ニチイ駅間パズル・だからパズル大好き』（芦ヶ原伸之監修・集英社）です。演出法に工夫があるからです。視覚的な演出に力をそぐのが近年のパズル書の流行のようで、

コズアキンの一連の『迷路ブック』(TBS出版)、ダイヤグラム・グループ篇の『ポケット・パズル』シリーズ(平凡社)、さらには『ロンドン警視庁フォト・ミステリー』(中央公論社)やパズル絵本『魔術師タントロン12の難題』(ステイプ・ジャクソン著・社会思想社)などがその延長線上にあります。

何年か前『エース・オブ・エーヤス』(現在日本ソフトバンク社から日本語版が出ている)というシミュレーション・ゲームが、イギリスで評判がよかったので取寄せてみたところ、ゲーム盤もサイコロもなく全ページが第一次大戦中の戦闘機のコックピットからの視点で構成されている二冊の本が届いたときはかなりおどろきました。この二冊を二人が持ちあって空中戦ゲームを行うのです。このとき本で遊ぶ本という新鮮なアイデアにショックを感じたのですが、数年後にスチーブ・ジャクソンがパラグラフ選択形式によるアドベンチャー・ゲーム・ブックというまったく別の形で、このアイデアを完成普及させました。日本でも『火吹山の魔法使い』(社会思想社)が大ヒットとなり、以後この新しい遊びの形式は遊びの世界に新しい一ページを記録することになりました。

した。この方式をミステリの世界にもちこんで、こりにこった一九世紀末のロンドンという架空市街をつくりあげ、その中で読者と超人探偵ホームズとの推理を競わせるという趣向を見事に結実させたのが『シャーロック・ホームズの怪事件』(一見書房)です。

遊びの世界はいま、これまでに例をみない革命的な時代を迎えていて、R・P・G(ロール・プレイング・ゲーム)、アドベンチャー・ゲーム、シミュレーション・ゲームといったこれまでのゲームの世界ではまるで知られていなかった新語が新火山の噴火のように吹き荒れています。これらの最新ゲームの最新情報を精選解説したガイドブックに『SFファンタジーゲームの世界』(安田均著・青心社)があります。

コンピュータ・ゲームに関する情報、カタログ本、攻略法、さらにはルポ風の読みものが氾らんする中で、私が面白く読んだのは『アタリ社の失敗を読む』(スコット・コーエン著・ダイヤモンド社)で、コンピュータ・ゲームの創生期に、技術者の奔放なアイデアがどのように生かされてビジネスと結びつくのかという成功と挫折の伝説です。

「ゼルダの伝説」の攻略本が十数冊も出現するという異常レースになるまでは、私も一通りは攻略本も買っていたのですが、この時点でついに先頭集団から脱落するマラソン・ランナーになってしまい、攻略本をそろえるのはあきらめました。それまでの攻略本の中で私がすぐれていると思ったのは『裏ワザ大全集』（二見書房）シリーズです。コンパクトで開きやすいというのが最大の理由です。実用書が実用書であるための存在理由は案外こんな単純な一点にかかっていることがあります。

いま空前のファミコン・ブームをみていると、遊びの世界という怪物が、伝説の天翔けるドラゴンのように、翼を得て、地下世界から地上界にさらには天上界へ浮上しつつあるような錯覚があるかもしれません。しかし忘れてはならないことがひとつあります。ファミコンのブームはファミコンという一ゲームの熱狂的なゲームであって、遊びそのもののブームではないことです。私たちは過去に何度か遊びのブームを体験し、マスコミはそのたびに遊びの時代がやってきたかのように書き立てました。ルービック・キューブしかり、インベーダーゲームしかりです。ファミコンはどのソフトでもこなせるが、それ

以外の遊びは一切知らないというのでは私たちの遊びに對する平衡感覚はどこかアンバランスだといわれても仕方ありません。とび立ったのはいいが着地ができないのではないかと心配されるような空飛ぶ機械——そんなものをつい想像してしまうのです。

おしまいに英語のなぞなぞをもうひとつ。

問 飛ばないヒコキを発明したのはだれ？

答 ライト兄弟でなくてロング（wrong）兄弟。
フラザリス

参 考 資 料

●アリス&キャロル

L・キャロル／柳瀬尚紀訳

『もつれっ話』（れんが書房新社）

『不思議の国の論理学』（朝日出版社）

『枕頭問題集』（朝日出版社）

L・キャロル／神津朝夫訳

『ルイス・キャロルの論理ゲーム』（泰流社）

M・ガードナー／柳瀬尚紀訳

『ルイス・キャロルかつらをかぶった雀蜂』（れんが
書房新社）

ジョン・フィッシャー／高山宏訳

『キャロル大魔法館』（河出書房新社）

レイモンド・M・スマリヤン／市場泰男訳

『パズルランドのアリス』（社会思想社）

高橋康也

『キャロル・イン・ワンダーランド』（新書館）

『アリスの幻想』（新書館）

『アリスの国の言葉たち』（新書館）

●ノンセンスの香り

高橋康也

『ノンセンス大全』（晶文社）

谷川俊太郎／和田誠

『ナンセンスカタログ』（大和書房）

エドワード・リア／高橋康也訳

『ノンセンスの絵本』（河出書房新社）

エリザベス・シュール／高山宏訳

『ノンセンスの領域』（河出書房新社）

アルベルト・マンゲル他／高橋康也監訳

『架空地名大事典』（講談社）

ホルヘ・ルイス・ボルヘス／柳瀬尚紀訳

『幻獣辞典』（晶文社）

●不思議の本

ダグラス・R・ホフスタッター／野崎昭弘他訳

『ゲイデル・エッシャー・バツハ——ある不思議の環』

（白揚社）

寺山修司

『不思議図書館』（角川文庫）

荒俣宏編

『世界神秘学事典』（平河出版）

G・ジェニングス／市場泰男訳

『エピソード魔法の歴史』（教養文庫）

●暗号&解読

長田順行監修 日影文吉・中井英夫・泡坂妻夫

『秘文字』(社会思想社)

長田順行

『暗号』(教養文庫)

『暗号と推理小説』(教養文庫)

『暗号の秘密』(菁柿堂)

D・H・ゴードン／津村俊夫訳

『古代文字の謎』(教養文庫)

M・ガードナー／岸田孝一訳

『暗号で遊ぶ本』(自然社)

一松信

『暗号の数理』(ブルーバックス)

長田順行編

『ワンダー暗号ランド』(講談社文庫)

●形と空間の不思議

長尾みのる

『視覚のいたずら』(ダイヤモンド社)

吉田夏彦

『絵のパラドックス言葉のパラドックス』(岩波書店)

ブルーノ・エルンスト／坂根巖夫訳

『エッシャーの宇宙』(朝日新聞社)

岩成達也訳

『数学的魔術の世界』(河出書房新社)

M・C・エッシャー／坂根巖夫訳

『かたちと空間——多次元世界の軌跡』(朝倉書店)

H・ヴァイル／遠山哲訳

『シンメトリー』(紀伊國屋書店出版部)

ヨースト・エルファーズ／坂根他訳

『タングラム——智恵の板』(河出書房新社)

●パズル&ゲーム

M・ガードナー編／田中勇訳

『サム・ロイドのパズル百科1、2、3』(白揚社)

野崎昭弘

『数学屋の楽しみ——パズル・ゲーム・言葉遊び』

(白揚社)

M・ガードナー／上島建吉訳

『SFパズル』（紀伊國屋書店出版部）

フランコ・アゴスチーニ／高木茂男訳

『数学ゲーム』（平凡社）

M・ガードナー／一松信訳

『数学カーニバル』（紀伊國屋書店出版部）

滝沢てるお

『ザ・クロスワード』既刊6巻（平凡社）

ミロシユ・サブレットル編／大竹国弘訳

『世界ゲーム百科』（ベースボールマガジン社）

H・E・デュードニー／高木茂男訳

『パズルの王様傑作集』（ダイヤモンド社）

アンジェラ・フォックス・ダン編／みやたよしゆき訳

△悩め！ パズラー▽（啓学社）

『挑戦その1 図形にチャレンジ』

『挑戦その2 数にチャレンジ』

『挑戦その3 推理にチャレンジ』

クラディミール・コズアキン／岸田孝一訳

『迷図MAZESIS』（TBS出版会）

グレッグ・ブライト／岸田孝一訳

『迷路の本』（TBS出版会）

中村義作

『スーパーパズル』（講談社）

フレデリック・グランフェルド／清水哲男訳

『ゲームの世界』（TBSブリタニカ）

田中美

『科学パズル1、2』（カッパブックス）

ダイヤグラム・グループ編

『大迷図 正・統』（CBSソニー）

△ポケットパズル▽（平凡社）

『1 迷路パズル』

『2 論理パズル』

『3 実習パズル』

『4 図形パズル』

『5 数学パズル』

ミリントン／芦ヶ原伸之訳

『パズル狂・ゲーム狂の本』（東京図書）

高木茂男

『Play Puzzle パズルの百科 part 1、2』（平

凡社）

木村良夫

『パソコンで遊ぶ数学』（ブルーボックス）

M・ガードナー／高木茂男訳

『数学ゲーム1、2』（ブルーボックス）

有澤誠

『頭脳トレーニング』（岩波ジュニア新書）

中村義作・小林茂太郎・西山輝夫

『数学パズル正・続』（中公新書）

M・ガードナー／金沢養訳

『おもしろい数学パズル1、2』（教養文庫）

ペレリマン／藤川健治訳編

『遊びの数学』（教養文庫）

ガリベルシュティン／松野武訳

『物理のおもちゃ箱 正・続』（東京図書）

坂本種芳・坂本圭史

『たのしいマジック』（教養文庫）

M・ガードナー／島田一男訳

『aha! ひらめき思考』（日経サイエンス）

竹内郁雄訳

『Gotcha ゆかいなパラドックス』（日経サイエンス）

馬場雄二

△文字遊び百科△ 全5巻（東京堂）

『1 漢字パズル 上』

『2 英語パズル 上』

『3 推理パズル』

『4 漢字パズル 下』

『5 英語パズル 下』

●ミステリー・ゲーム

デニス・ホイートリー／土屋政雄訳

『マイアミ沖殺人事件』（中央公論社）

『誰がロバート・ブレンティスを殺したか』（中央公論社）

論社）

『マリンゼー島連続殺人事件』（中央公論社）

『手掛りはここにあり』（中央公論社）

デニス・ホイートリー／各務三郎訳

『シャーロック・ホームズ 呪われた館』（二見書房）

『シャーロック・ホームズ 10の怪事件』（二見書房）

A・キャロル／土屋政雄訳

『ロンドン警視庁フォート・ミステリー1、2』（中央

公論社)

●アドベンチャー&SFゲームブック

安田均

『SFファンタジーゲームの世界』(青心社)

R・プラモンドン／鈴木銀一郎訳

『ロールプレイングゲームハンドブック』(翔企画)

ジャクソン&リビングストン

『アドベンチャーゲームブックシリーズ』(教養文庫、

創元文庫)

●なぞなぞ&ことば遊び

柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子編

△シリーズ世界のなぞなぞ▽(大修館)

『1 赤のなぞなぞ』

『2 白のなぞなぞ』

『3 黒のなぞなぞ』

福音館書店編集部編

『なぞなぞの本』(福音館)

鈴木棠三

『日本のなぞなぞ』(岩波ジュニア新書)

平野敬一

『マザー・グースの唄』(中公新書)

渡辺茂編著

『マザー・グース事典』(北星堂書店)

笑鬼会本院冗皇

『笑学強加書——ことばあそびばらえてい』(教養文庫)

●松田道弘

△松田道弘 あそびの本▽(筑摩書房)

『1 トランプ・マジック』

『2 ボード・ゲーム』

『3 ふたりで遊ぶ本』

『4 ひとりで遊ぶ本』

『5 面白いトランプ・ゲーム』

『6 チェスの楽しみ』

『トラップものがたり』(岩波新書)

『ジョークでパズル』(講談社)

『不可能からの脱出』(王国社)

『トリックのある部屋』(講談社文庫)

『トリック専科』(教養文庫)

『奇術のたのしみ』(筑摩文庫)

『トリックものがたり』(筑摩文庫)

●泡坂妻夫

『魔術館の一夜』(社会思想社)

『トリック交響曲』(文春文庫)

●安野光雅

『狩人日記』(平凡社)

『空想工房』(平凡社)

『起笑転結』(平凡社)

『空想茶房(対談)』(平凡社)

『ふしぎな絵』(福音館)

『さかさま』(福音館)

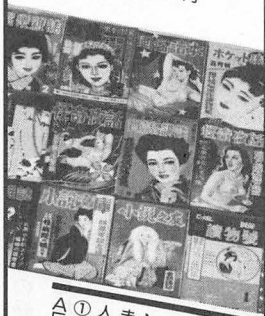
『天動説の絵本』(福音館)

『算私語録』(朝日文庫)

『手品師の帽子』(新潮文庫)

●桑原茂夫

雑誌で見る戦後史
福島鑄郎著 日判・2000円
『新生』からFLASHまで、雑誌が時代を語る
敗戦への道／アメリカ、アメリカ、アメリカ／大衆娯楽の復活／女性の進出と自立／明へ、
豊かに／広く／週刊誌時代を追う／思い出す
本、懐かしい本／戦後雑誌検証



まんがが日本の歴史
編集委員 加藤文三 黒羽清隆 土村徳三
いま歴史がおもしろい
まる暗記する歴史から、学び、考え、発見する歴史へ。
人間ドラマをおしてほんこの歴史が見えてくる。
全12巻
①絶賛発売中／以後6月より毎月1冊刊行
A5判・各巻2000円

大月書店 東京文京本郷2 03(813)4651代

△桑原茂夫・不思議の部屋▽（筑摩書房）

『1 ことば遊び百科』

『2 だまし絵百科』

『3 アイ・トリック百科』

『4 からくり百科』

『アリスのティーパーティー』（河出文庫）

●坂根巖夫

『遊びの博物誌1、2』（朝日文庫）

『新・遊びの博物誌1、2』（朝日文庫）

『かたちの曼陀羅』（河出書房新社）

『境界線の旅』（朝日新聞社）

●福田繁雄

『イリュージョン 視覚トリック』（六耀社）

『ちよっとしやれたプレゼントブック』（祥伝社ノンブック）

鬼塚満寿彦・福田繁雄監修

『自由工作Ⅱゲームと遊び△学研の図鑑▽』（学習研究社）

旭屋書店・人文会研修会報告

本年二月十九、二〇日の両日、人文会恒例の研修会が大阪旭屋書店グループ（本店、ナンバ店、アベノ店）とのあいだでおこなわれました。この研修会は今回で五回目になりますが、これまではすべて東京の書店さんとの研修会でした。今度はじめて東京以外の書店さんとの取組みになるわけで、しかも大阪に向いての会でしたので、いままではない展開になったり、思わぬ不手際も生じりましたが、なんとか無事に、そして有意義な会をもつことができました。蔵本齊常務をはじめ出席された旭屋書店のみなさま、御助力をいただいた東販・日販のみなさまにあつく御礼を申し上げます。

本号では、旭屋書店を代表して本店第一課の隅山泰助課長に、この研修会の報告および総括を、さらにはこれらを踏まえて人文書販売の将来の方向への見通しなどを書いていただきました。御多忙のなかを執筆してくださったことを心より感謝いたします。また人文会からは弘報委員の平凡社・丸山正美が執筆しました。

弘報委員会

●旭屋書店営業部本店 隅山泰助

雑高書低から雑低書低へ、マガジンアンドコミックハ

用書が読者に歓迎される昨今。

ウスから郊外店へ、そしてマンガ化された専門書及び実

出版界全体が大きく変ろうとしていることは、良くこ

存知のことと思います。

一九八〇年代に入り、前記した以外のさまざまな大きな変化が起り、既存の概念では判断することができず、この六年余りの間、私達も解答を求めて右往左往しているのが現実です。

その中でも読者の変化においては、本という情報の源に対する価値感が、世代によって大きく二極分化したということ事です。

本という情報に接する時、そこから情報を得ようとする場合、非常に能動的な姿勢を要求されます。しかし、このニューメディアの発達した時代、そして情報が氾濫している状況の中で育った今の若い世代にとって、能動的に情報を求めなくても受動的にでも情報を得ることができるようになっています。そこで本という情報に能動的に取り組む世代と、そうでない世代の二極分化が起っているのだと思います。

また、学問の体系そのものが大きく変化し、今まで私達が基盤としていたジャンルを横断した飛び越えて繋がった本が出版され、当然人文書の分野においてもニューアカデミズムが台頭し、思想・歴史等においても新しい

流れが定着しつつあります。

このような状況の中で、人文会と旭屋書店の大阪三店舗との間で研修会が開かれ、いろいろな問題が提起されました。

まず各店におけるの共通の問題として、各出版社との種々の情報の収集及び伝達について、現実はどうかという事です。

非常に初歩的な問題で恐縮ですが、現実に戻って見て良く考えて見ますと、各社からの新刊案内・売行良行書等の情報が確実に処理できないほど多数送られていても、私も現場では意外にもその情報が生かされていないということ事です。

現実の日々での一冊一冊の本の動きと、送られてくる情報の接点で、比較的に見つけ出し難いというのが現実です。

人文書等の初版二・三千部の新刊の動きは、非常に小さく計測することが難しく、担当者がその動きをキャッチして判断することができず、見逃してしまうというのが実情です。他の分野を含めて学問的な情報や知識が今まで以上に必要とされ、日常的な仕事だけでなく、先読

みの要素がすべてのジャンルで必須条件になっていますが、そのような状況の中で意外にも私どもの担当者各出版社の営業の方々との情報交換が少なく、もともと電話やファクシミリ等を通しての日々の情報交換を行わなければならないと痛感しました。やはり、日常業務の多忙さを理由に、木目細かい情報交換を疎かにし、それを知らなから放置していたことに、私も含め担当者全員が反省させられました。

次の問題としては、旭屋書店の既刊書の販売方法は、一冊一冊を確実にフォローするというところに重点が置かれ、非常にオーソドックスな展開の仕方が常でした。

しかし、昨今の読者の受動的な傾向から考えると、もっと能動的な姿勢が必要なのではないかという意見が各社から出ました。

本も一般商品と同様、単なる「もの」であることは現実です。昨今、一般商品もただ置いて販売しているというだけでなく、その店その店の付加価値をプラスして販売されているのが現状です。当然本においても、ただ「もの」としての扱いだけでなく、文化的な付加価値をプラスして、情報の源としての扱いが必要だということ

です。

読者のニーズを踏まえた上で、売場の担当者の感性を生かし、文化という情報の付加価値をプラスして、イベント等のフェアだけでなく、日常のジャンル別の棚構成の中で、ジャンルを越えた横断的な対応をしなければダメだということです。

一冊一冊の確実なフォローを大切にするあまり、棚の自由な動きを殺していたというのが現実です。棚は生きている、またそれを構成する本も日々刻々変化しているということをよく認識して、今後の販売方法を考えて行きたいと思います。

その他、私どもの各店への具体的なご指摘・ご指導を数多く頂き、私も含め担当者全員反省することばかりでしたが、この研修会で得られた成果を一つ一つ良く考え、原点に戻って日常業務に生かして行きたいと思っています。

二日間の長くて短い時間での話し合いの中で、私が期待したもっと突っ込んだ議論は時間の都合でできませんでしたが、この研修会での各出版社との話の中から感じたことが二点ありました。それは、各出版社が「読者の本に対する価値感が変わり、学問的な流れが大きく変化した」

ということを充分認識され、既にそのことに對し色々と対策を立てられ、新しい流れに向って進まれているというところが実感でき、非常に心強く思ったことでした。もうひとつは、このような厳しい状況のなかで、「人」の重要さ、「人の繋り」の大切さを痛感したことでした。

書店での業務のマニユアル化は、最低レベルの範囲においては可能ですが、それ以上になると人の感性に頼ることが非常に多く、棚を担当する人の感性が、棚というキャンパスの上に大きく反映されます。

「人の繋り」の中から得た情報に基づき、棚というキャンパスに、どのような色を使い、どのような構図で絵を画きあげるか、その人の感性及び人間性が大きく影響します。「企業は人なり」、「書も人なり」。読者のニーズと

時代の流れを的確にキャッチし、独断と偏見を排した棚作りを、今後展開して行きたいと思っています。

最後に、とかくこの出版・書店業界、教条主義的な、視野の狭い、偏見と僻に満ちた、そして過去の栄光と因習やイデオロギーから脱し切れない人々の意見が意外にも前面に出て、それが大多数の意見のように錯覚されがちです。

そのような意見に惑わされず、原点に戻って良く考え、そしてこの研修会で培った繋りを大切にして、コミュニケーションを深めて行きたいと思っています。

この度の貴重な研修会の開催、どうもありがとうございました。

●弘報委員会 丸山正美 (平凡社)

去る二月一九日(木)・二〇日(金)の二日間にわたり、人文会活動の柱のひとつである書店研修会が旭屋書

店との間で行われました。今年で五回目となり、会員社全社が長駆大阪へ出張、地元取次を交えるなど新機軸を

打ち出した研修会でもあります。

昨年より旭屋書店・出版社双方のアンケート交換という形で準備を進めた上で、当日はアベノ店、本店の順に訪問、会場を本店近くのホテルに設けて旭屋書店蔵本斎常務の基調講演と、本店・なんば店・アベノ店の概況説明を受けました。翌日は会員社二二社が三グループに別れ、旭屋書店三店舗との間で「リーグ戦」式に分科会討論が繰り広げられました。以下にその概要をまとめ報告いたします。

「旭屋書店グループの目指すもの」と題した初日の蔵本常務の講演は社の歴史にはじまり、創業の理念、現在の関西商圏地図、そして今後の方向まで示唆する総括的なものでした。今では海外も含め二二店舗を擁する旭屋書店も、昭和二十一年六月一〇日、大阪駅前の焼け跡（元の駅前店、現在のヒルトンホテル所在地）で旭屋商店から出発した時には売場面積わずか四坪。公職追放にあった創業者である先代社長は、当初書店組合に加入できず、また本の仕入にも苦勞、現金をリユックに上京、版元巡りをされた由。そんな中で、代替性も価格競争もない本という商品を扱う書店では、いつでも欲しい本が手に入

れられることが顧客への最高のサービスであるという創業理念となったようで、このことは今後も堅持していきたいとのこと。

他書店では置ききれない商品（例えば専門書）の充実、多様化する商品への対応は必然的に売場スペースの拡大（現在本店は六八五〇坪）をもたらし、これこそ大型店の存在価値ではあるものの、入居保証金が高騰した今日、都心、ターミナルの一等地への大型店新規出店はもはや困難となった由。他方、金融機関の週休二日制実施で拍車のかかる土曜通勤客の減少、他業界からの新規参入を中心とした郊外出店ラッシュをみていると、数字上は未だ表面化していないものの、ターミナル店への影響を考えざるをえず、郊外衛星都市への出店には無関心ではいられないとのこと。昨今の大会での商圏の変動をあらためて感じさせるものでした。

つづいて店舗毎に数字もあげての現況説明も受けました。まずなんば店。ターミナルのファッション街に立地する店という性格上、午後的高校生、夕方のOL、夜にかけてのサラリーマンと時間帯と客層の関係がはっきりしており、雑誌（とりわけ女性誌）、ビジネス書のウェ

イトが高いこと。客単価は比較的低く、したがって専門書の充実、棚の新陳代謝をめざしていること。人文書の売上構成比は教育書（特に保育書）、宗教書、歴史書の順であること。さらには「非婚時代」「シングル・ライフ時代」に対応した女性コーナーづくりの試みも報告されました。アベノ店からは、梅田・難波地区に比べ市街地再開発が遅れ、地下鉄の延伸によりターミナル機能が相対的に低下してきている中で、近隣の駅ビル、百貨店、書店の増床計画が逐次実施に移されつつある天王寺地区の概況につづき、専門書では理工書の売れ行きが悪い半面（寺が多いこともあって）仏教書、歴史書あるいは実務書が良く、客年齢・客単価とも高い等々の説明がありました。そして本店からは、世代間の本に対する価値感の違い、厚物学参が売れなくなったのと同様大学生でも概論・入門書テキストを買わなくなったこと、さらにはイデオロギーが後退して、領界をまたがる本あるいはニュー・アカデミズムが前面に出てくるような激しい変化が報告されました。読者への本に対する見方、考え方が変わってきていることの認識、旧来の体系・分類をのり超えた本を強調されていたことが印象に残ります。

以上の言わば総論を踏まえた上での二日目の分科会討論では、現在の業界が抱えている問題、課題が余すところなく語られた感があります。紙幅の関係もあり、論点のみ整理、列挙いたします。

新刊については、事前発注（予約）とパターン配本の関係、部数のダブリ・修正の問題に端を発し、新刊案内の店内回覧・周知と版元への返事、関連図書の情報・分類・申込締切日の明示といった日常業務に関するもの、取次の仕入規制、配本直後の取次在庫、書評のタイミング、店舗間の情報交換、そして買切版元の返品許容度に至る一連の議論がなされました。

一方店内にあつては、顧客サイドに立った商品構成と陳列方法、とりわけ若年層への「仕掛け」、それらのための版元側からの切り口の提供、管理の複雑化を軽減するための工夫とツールとしての売行良好書・基本図書のチェックリストの用意、さらには単品選択常備の可否、他店にはない商品を充実するための方策、具体的なフェア・イヴェントの提案と多岐にわたりました。PR雑誌、宅配サービスが話題になったのは時流というものでしょう。

以上のとおり、事の大小、レベルの違いは様々で、今回は問題点の整理、所在の確認に留まったくらいもありますが、改善・進歩のためには書店・版元間の意志疎通、コミュニケーションの重要性和、取次の参加があらためて痛感された次第です。

最後になりましたが、ご多忙のところを研修会にご参加いただいた蔵本常務、書店側の窓口・取りまとめ役の任にあたられた本店隅山課長をはじめとする旭屋書店の皆様と取次各位に、誌上を借りてお礼申しあげ、報告・記録いたします。

〔弘報委員会より〕

○人文会では、本号に報告記事を掲載しましたように、この二月十九、二〇日に大阪旭屋書店グループとミニ研修会をおこないました。そこでの具体的な討議は別稿にゆずりますが、アペノ店とのあいだで今秋にも在庫僅少本・旧定価本フェアをおこなおうということになりました。これは昨年、名古屋のちくさ正文館で実施したフェアの成功にヒントを得たもので、店頭でなかなかめぐりあうことのできない専門書が中心に良く売れるようです。ときどきこのような試みをしていきたいと思うのですが、興味をもたれる書店さんがあればぜひ御一報下さい。

○この一月に盛岡の東山堂さんでブックフェアをおこない好評のうちに終了しました。また、東大本郷生協でも例年通り、人文会各社の昨年の新刊を一堂に集めてのフェアをおこない好成績をおさめました。それぞれのフェアに尽力された関係各位にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

○この四月から主要な大学図書館・公共図書館に向けて「人文会新刊月報」というダイレクト・メールをお送りすることになりました。これは、通常の新刊案内が未刊本の宣伝であるのに比して、前月に確実に刊行された本の御案内だということに新機軸を打ち出そうという試みです。この月報で人文会22社の出版物がすべてわかるというのがミソです。御活用下さるようお願いします。

人文会特約店にみる中小書店の消長

村上信明

柴田信さんは共著『出版販売の実際』（日本エディタースクール出版部）の中で、「書店の戦略は二つしかありません。ひとつは立地です。立地が戦略のほとんど全部を占めているといっても過言ではありません。戦略の二つ目は商品構成、つまり品揃えといわれるものです」と述べている。立地と品揃えが経営戦略の大部分を決するという考え方に反論する書店経営者はいないだろう。書店員の接客のよさ、きれいな店舗、店内の整理整頓などを強調する書店もあるが、それは柴田信さんも書いているが、戦術の部類に入る。

だが、柴田信さんが同書にあえて触れなかった戦略がある。売場スペースについてである。書店の経営戦略は、まず立地、次に立地に応じた品揃えにあるという柴田信さんの論は、あくまでも「出版社は書店をどう生かすか」という版元営業担当者向けに発せられたもの

で、書店経営者に向けられたものではない、ということに留意する必要がある。「まず立地、次に品揃え」は書店の規模の大小を問わない場合の原則であって、競合店を意識せねばならない書店経営に力点を置いて言えば、立地と品揃えの間に売場スペースという重要な戦略が割り込んでくる。

まず立地、次に売場スペース、そして立地と売場スペースに応じた品揃え、というのが書店経営戦略の優先順位となるはずである。

駅前的好立地に小規模店をいくつも出店してきた新宿・山下書店社長の山下重之さんを取材したとき、「坪当たり売上げが高いことで注目されるが、資金がなかったので仕方なく小さい店を出したのだ。坪効率がよくても店が小さければ売上げは多くはならない」と小スペースのネックをあげた。立地に差がなければ売場スペースの広い方が優位に立つ。有

り体にいうと、人文書の品揃えのいい小規模書店は、近くの大型書店に呑み込まれてしまふのが現実である。

その意味で、かつて紀伊國屋書店先代社長の田辺茂一さんが唱えた「書店スペース産業論」は、さまざまな論議を呼んだが、事の本質をついた至言といわざるを得ない。

論より証拠。人文会の特約店リストを初回から追って見ると、中小スペースの書店は回を追って特約店から外れ、いまでは数えるほどしか残っていないことがわかる。

一九七四年、人文会の第一回特約店は一八八店。大学生協（大学購買部、協賛会を含む）二五店を除くと、書店は一六三店であった。その一六三店の中に一〇〇坪未満の書店が三店も、選定されていた。それから十二年を経

た昨年の第七回特約店は「一三八店。大学生協二六店を除くと、書店は一二二店。その中で一〇〇坪未満の書店は一〇店に減っている。その一〇店の中で初回から特約店に選定され続けた書店は五店に過ぎない。

五店を売場スペースの広い順にあげると、銀座・旭屋書店（九二坪）、鹿児島・金海堂（九〇坪）、神戸・コーベブックス（七〇坪）、北九州・金栄堂（五〇坪）、京都・ナカニシヤ書店（二五坪）。

ナカニシヤ書店は、「京大正門前に位置し、顧客の九五％が京大の学生・教職員。京大の教科書の七〇％を販売」（新文化編『ブックストア全ガイド』）という特殊な存在である。そうすると、「五〇坪以下はもはや小規模店」といわれる書店業界の現状認識に照らせば、人文会の特約店として初回から選定され続けている小売場スペースの書店は、全国で金栄堂一軒のみということになる。

金栄堂は、人文社会科学書の専門店ではないし、格別に「個性化」を打ち出した書店でもない。「顧客をしつかりつかんできた書店」といった方が表現に無理がない。ひと頃よく

いわれた専門店化を図った書店でもないのに選定基準の厳しい人文会特約店であり続けることは驚嘆に値する、いや称賛しなければならぬだろう。

が、人文書の出版社は驚嘆や称賛でお茶をにごしてはいけぬ。小売場スペースの書店で、十年以上も人文会の特約店であり続けたのが、全国で金栄堂一軒だけだったという事実の方をじっと見つめる必要がある。小売場スペースの書店で特約店に中途昇格したのは、仙台・八重洲書房（四〇坪）、名古屋・ウニタ（二八坪）の二店だが、この二店とも、大学の研究室を中心とした外商で補って人文会特約店の選定基準を必死でクリアしている。このことは、小売場スペースの書店が人文書の品揃えに力を入れても、有力書店が広いスペースでそれを呑み込んでしまえば、対等な勝負はできないことを物語る。

田辺茂一さんの「書店スペース産業論」が事の本質をついた至言といわざるを得ないのは、中小スペースの書店のほとんどが人文会

特約店から去っていったことで明らかになる。言い換えると、人文会も特約店の選定において「書店スペース産業論」を忠実に実行してきたのである。

話を少し戻そう。ひと頃よく「中小書店の生き残る道は、個性化、専門店化にある」といわれた。しかし、途中参加の難しい医学書専門店と、一部のコミック専門店を除くと、個性化、専門店化で経営的に成功した中小書店はほとんどない。個性化、専門店化で成果を上げ得たのは、やはり大型書店であった。小規模店に肩入れしたくてこんなことをいうのではなく、書店経営は真面目な出版社の思い入れや激励だけではいかんともしがたい、厳しい現実にとさらされ続けている、といったのである。

最後に、人文会の初回特約書店一六三店↓現特約書店一二二店↓差し引き五一店減は、十数年来の大型書店の急増とは逆行した関係にあることがわかった。人文会が地域集中化を進めたのか、販売促進が行きわたらなかつたのか、気になるところである。

（「新文化」記者）

人文会会員名簿

(〒113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

1987. 5. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	F A X
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481	292-0475
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	橋本 盛作	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510	265-7767
幹 事	紀伊國屋書店	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘5-38-1	439-0125	439-1094
	勁 草 書 房	石橋 雄二	112	文京区後楽2-23-15	815-5277	814-6854
	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8105	813-9061
幹 事	春 秋 社	神田 治	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611	253-1384
幹 事	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501	255-4506
	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666	945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町77	269-1051	269-1092
幹 事	筑 摩 書 房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651	295-0220
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4 新宿東海ビル	356-1541	341-1833
会 長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	821-2111 内7955	
	“	竹内 康一	“	“	811-8814	812-6958
	日 本 評 論 社	後藤 光行	160	新宿区須賀町14	341-6161	341-6990
	福 村 出 版	福村 惇一	112	文京区小石川1-3-17	813-3981	818-2786
	平 凡 社	丸山 正美	102	千代田区三番町5Kビル	265-4492	263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見2-17-1 法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131	818-6435
幹 事	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川3-7-2	814-5521	814-8600
	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見2-6-9	262-3231	262-6938
	有 斐 閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811	262-8035
	吉 川 弘 文 館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151	812-3544
休 会 中	東 京 創 元 社		162	新宿区新小川町1-5	268-8231	268-8030

販売企画委員会 ◎菊池 ○後藤 石橋 重光 竹内 佐藤 川越

弘 報 委 員 会 ◎西谷 ○原田 橋本 渡辺 丸山

調査・研修委員会 ◎萬洲 ○濱地 古川 岡田 福村 市川 武

◎印は委員長 ○印は副委員長

脳死を考える

新しい医療倫理を求めて

〔からだの科学選書〕

福岡誠之著

1500円

臓器移植に対する要望が高まるに従い、脳死問題が注目されている。本書は、脳神経外科の現場から問題を提起する。

抗議して 生き残ろう

私の反核平和論

小中陽太郎著

1300円

米ソの核軍拡競争のなかで、行動する作家小中陽太郎が訴える反核平和論。

日本評論社

新宿区須賀町14番03-341-6161

林達夫著作集

〔全6巻〕

久野輝収
花田清輝

別巻I 書簡

林達夫の精神の軌跡を、
今書簡が浮彫りにする

〈手紙の人〉林達夫の二十歳から最晩年にまで至る数多くの書簡を集め、著作集の別巻として新たに送る。

●定価2,500円

- 1 芸術へのチヂエローネ
- 2 精神史への探究
- 3 無神論としての唯物論
- 4 批評の弁証法
- 5 政治のフオークロア
- 6 書籍の周囲

●定価各1,800円

平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5
振替・東京8-29639/03-265-0455

法政大学出版局

ピエール・ペール著作集／第5巻

歴史批評辞典Ⅲ

野矢 協訳・解説 歴史批判、神学・形而上学批判の巨匠として18世紀ヨーロッパ最大の思想家として知られた大歴史批評辞典Ⅲ巻完結/定価88000円

—— フロラ・トリスタン ——

ロンドン散策

＜イギリスの貴族階級とプロレタリア＞
小杉隆芳・浜本正文訳 鋭い社会批判と豊かな人間観察の眼をもつ19世紀の都市生活風景を描写した古典的な名作。定価3900円

—— ミッシェル・セール ——

干涉〈ヘルメスⅡ〉

農田 彰訳 相互理解にもとづく諸科学間の新たな関係の可能性を探る、ライプニッツの理論を現代に蘇らせる新たな科学的精神の誕生を告げる。定価2800円

東京都千代田区富士見2/電03-237-1731

家永三郎・松永昌三・江村栄一編

A5判／八五〇〇円

明治前期の憲法構想増訂版第二版

明治憲法の制定に先立ち、国民各層が自発的に構想した幾種類もの憲法草案があった。今回、増訂版後に新たに入手できた三種の文献による追補を加えた。

有本 章著

A5判／八〇〇〇円

マートン科学社会学の研究

●そのパラダイムの形成と展開 マートンの未だその構造を体系的に掘り下げて研究されたことのない部分、すなわち「科学社会学」に焦点をあてた力作。

福村出版

東京・文京・小石川1-3
電話(03)813-3981(代)

●創業70周年記念出版●

論争学説 日本の考古学

全6巻・別巻1

桜井清彦・坂詰秀一編集

第3回本記 ③縄文時代II 3500円

弥生文化の研究

全10巻

金関 恕・佐原 眞 編

第6回本記 ⑧祭と墓と装い 3200円

雄山閣

千代田区富士見2／振替東京3-1685

妊娠中絶裁判

マリ・クレール事件の記録

＜シヨジール＞編・ポー・ボワール序 裁かれるのは人か、法か。世論を二分したフェミニズムの記録。辻由美訳 三〇〇円

危機に立つドイツ精神

クルツィウス、ワイマル共和国の崩壊とヒトラーの登場でドイツとヨーロッパの文化を論ずる。南大路一訳 二〇〇円

スターリン時代

元ソヴェエト諜報機関長の記録

クリウツキー、ソヴェエト大崩潰やヒトラー日本の秘密協定探知のスパイ活動の全貌。第二版。根岸隆夫訳 二〇〇円

古代哲学史

タレスからアウグスティヌスまで

アリストテレス、プラトティノス研究第一人者による比類なき古代哲学鳥瞰。イデアと神と真理と。岡野川田訳 三〇〇円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

加藤尚武著

定価1500円

バイオエシックス とは何か

技術進歩で脳操作、男女産み分け、臓器移植等が可能になった今日、生命倫理学のあり方を論ず。付・対談／中川米造「テクノロジーとしての医療」

東京・文京 小石川 3-7 未来社 電話(03) 814-5521

おもしろ学校Qチャンネル

名取弘文対話編

四六変型判カバー付 一三〇〇円

『おもしろ学校開校記念日』〈有斐閣新書〉の著者が、桂枝雀・干刈あがた・池田浩士・石川さゆりさんらと出会い、語り合う。

新書わたくしたちの憲法

宮沢俊義・国分一太郎著

〈有斐閣新書〉 七五〇円

毎日出版文化賞受賞の名著をハンディにしてお届けします。

有斐閣

桜井徳太郎著作集

全10巻

柳田國男との邂逅から四十年
独自の方法論で日本民俗学の
新たな領域を構築した

●「桜井民俗学」の集大成！

●第1回本／4月発売 定価七八〇〇円

●東アジアの民俗宗教

日本の研究成果をふまえて、東アジアに展開するシャーマニズムの比較研究を推し進める一連の論考を収録。A5判・一六八頁

伝承の相貌

彩な著者の最新エッセイ集。二五〇〇円

吉川弘文館

113・東京都文京区本郷7-2-8／電話03-813-9151

D・ヘップ著 心について

白井、鹿取、他訳 〈心と脳〉をめぐる混迷を明快に解く、代表的な心理学者の遺作 ■二四〇〇円

行動と進化 進化の動因

ピアジェ／芳賀純訳

ピアジェ晩年の最重要著作で、彼の全思想を集約した本。■一八〇〇円

語用論

リーチ／池上、河上訳 現在次第に重要性を増しつつある語用論を平易に解説する ■四五〇〇円

紀伊國屋書店

本店：東京都新宿区新宿3-17-7
出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1

御茶の水書房

関 嶺野著

野蛮としてのイエ社会

A5変型判・400頁・2600円

日本において資本主義はなぜ成立したのか。その根拠を武家社会の「イエ」構造とフロンティアの存在に探る冒頭の書き下ろし論文150枚。教育、巨大科学への完膚なき批判、現代ソ連に関する長篇論文を収録。家族・国家・私有財産を問い、民衆自身によるノモス社会を模索する批判的思考の集成。

韓国民衆版画集

ウリ文化研究所編 B5判・2000円

〒102 東京都千代田区九段北1-8-2
電話 03(265)5746／振替東京 8-14774

最終演劇への誘惑

佐伯隆幸 アンクグラ後の現代演劇情勢批判と、「物語」を語らない演劇の考察。舞台の表象批評集。2200円 250

ソ連の国防と東欧

松井弘明 大戦後より今日に至るソ連の国防政策の変化を中心に軍事側面からダイナミックに考察。2800円 300

ヴェーバーと丸山政治学

滝村隆一 丸山政治学批判の第二弾。政治権力論の解体のために、ヴェーバー学説を検討する。2000円 250

女の目で見える 講座 女性学4

女性学研究会編 女の視点から学問を捉え直し、フェミニズムの潮流を追う。講座 女性学全4巻完結 2100円 300

東京文京 後楽2-23 勁草書房 振替東京 5-175253

男が文化で、女は自然か？

性差の文化人類学

アードナー、オートナー他 山崎カラ
ル監訳 女と男の関係をかえる
レヴィ=ストロース以後の人類学のも
っともスリリングな論争。 2300円

幻想物語の文法

『ギルガメシュ』から『ゲド戦記』へ
私市保彦 神話、昔話、ゴシック・ロ
マンズ、ファンタジー……4000年の時
空間を飛翔し、「他界」と「分身」の幻想の
深層にひそむものを解説する。1600円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255) 4501

日本古代国家の成立

【内容】邪馬臺国／邪馬台国の習俗と宗儀 邪馬
台国畿内説10の知識 国家の形成／たなか大
王雄略 河内王朝 大兄制と皇位継承法 古道
山の辺の道 河内の古道 茅渚道 遺跡と遺物
古代ヤマト政権と鉄剣銘 三つの銘文と日本古
代史 伝承と史実／アメノヒボコ伝承 因幡の
美女八上比売の嘆き 聖徳太子像の問題点他

直木孝次郎著
四六判 三三四頁
定価 一三〇〇円

復刊

社会学の根本問題
ジンメル／阿閉吉男訳
〔教養文庫〕400円

東京・本郷 **社会思想社** 813-8105

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

マドンナがしとめた
脳の進化は女性から始まった

キヤルビン／須田・足立・寺本訳 気鋭の神経
生物学者が衝撃的仮説をもとに脳の進化の謎に
挑んだ刺激的な科学エッセイ。 二〇〇〇円

表情分析入門
表情に隠された意味をさぐる

エクマン・フリーセン／工藤 力訳編 顔の表
情を瞬時に読みとるための知識と実技を豊富な
写真入りで解説した興味深い書。 二八〇〇円

非売品

遊行の博物学——主と客の構造1

●松岡正剛 主と客の二重構造をたて軸に、古代
から江戸・現代に至るまで、仏教的なるものなど
日本文化の特質を縦横無尽に論ずるユニークかつ
示唆豊かな白眉の日本文化論！ 3200円

②国家と天皇 大系 仏教と日本人全12巻

●黒田俊雄編 日本仏教と天皇制の拮抗と協調の
関係。執筆・黒田俊雄・佐々木宏幹・山折哲雄・
大石雅章・佐々木馨・小澤浩・佐々木令信・佐藤弘夫
5月下旬刊／第7回配本／25000円

春秋社 東京都千代田区外神田
2-18-6 ☎(03)255-9611

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印